
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 42 号

< 目次 >

巻頭言	… 1
特集 台湾／日本に行けない台湾研究	… 3
学会活動報告	… 16

巻 頭 言

「台湾に行けない台湾研究者」の選択肢を考える

日本台湾学会理事長 松田康博

欧米に行きましょう！

提言というよりもこれは「暴言」かもしれない。万人には通用しないことは百も承知なので、頭の体操だと思って読んでいただきたい。言うまでもなく、台湾は徹底したコロナ水際対策をとり、ビザ無し渡航を2年以上停止し、一度は再開した居留ビザ（訪問学者）の発給を停止して10カ月以上経つ（2022年3月現在）。つまり、例外的に長期滞在ビザを得た人と台湾籍の方を除き、我々は台湾に渡航することができない。運良く渡航できたとしても厳格な隔離政策が待っている。

実は私は、昨年末に、所属大学の学術交流でフランスに行くことができた。この原稿も米国で書いている。これは台湾の大学での客員研究をねらって2020年から3回空振りしたりベンジの結果である。昨年は、台湾からの招聘状を入手し、翌週にビザ申請をしようとしていた矢先にデルタ株の感染爆発があり、またも「鉄のカーテン」が目の前でぴたりと閉じたのだ。

そして、「来週には再開しないかな」と陳時中氏が何を言うかを毎日のようにチェックしているうちに夏休みが終わってしまった。恨めしい。ところがその時、たまたま前年から順延していたフランスの研究機関との交流を再開するかどうかの決断に迫られたのである。

日仏両国の出入国規制、両機関の出張・受け入れ規制、フランス国内での行動規制などをつぶさに調べたところ、指定ワクチンの接種完了証明があれば、フランス渡航にはビザも隔離もいらぬことが判明した。思い切って賭に出た結果、1カ月間パリに行くことができたのである。「それなら米国出張ができないか」と年末に思い立ち、計画した結果、オミクロン騒動をすり抜けて3月の米国出張を実現できた。

欧米の各都市で、台湾人を含めた新老朋友と（会食を含めて）対面で意見交換をしていると、あたかも台湾にいるかのような錯覚に陥る。対面のレクチャーや座談会では、参加者を見回して反応を確認しながら熱弁を振るった。ここスタンフォード大学フーバー研究所では「蔣経国日記」などを閲覧している。オンラインとは違う、格別の充実感がある。

指定ワクチンが接種完了していれば、いまや欧米（以外でも増加中）ではほぼ隔離なしで入国が可能である。日本の入国規制も今年3月から大幅緩和され、指定ワクチンの接種が完了し、帰国前後のPCR検査で陰性ならば、米国等からの入国の際、隔離・自宅待機なしで、しかも公共交通機関で帰宅できるようになった。

日本の場合、おそらく最大の障碍は所属機関の規制だろう。大学や研究機関には、いまだ海外出張が原則禁止のところがあるはずだ。まず、個別審査による「例外的渡航」の窓をこじあける必要がある（私の所属する大学がどのような制度をとっているか参考にした方は個別にご相談ください）。次に、対面方式が回復しつつある授業、会議、面接などを「海外出張者のためハイブリッド方式を可能にすること」を組織内でコンセンサスにする必要がある。

「いや、たぶん今年は台湾に行けるはずだ」という声も聞こえる。私もそう思うし、思いたい。しかし、私が主張するのはヘッジの発想である。突然台湾に行けなくなるリスクは今後も続く。新たな変異株の出現や次のパンデミック（例えば「COVID-22」とか）の際、どの国・地域がどのような反応や対策をとるか、我々には容易に想像がつく。台湾は次のパンデミックでも恐らく即座に最強の水際対策を取るはずである。したがって今年の夏休みに台湾に行けたとしても、それがいつまで続くかわからない。

他方ウィズコロナを選択した欧米（およびその他）は、かなりの確率で渡航可能であり続けるはずだ。台湾が国境を閉じてても欧米はすぐには閉じない。私は今年の夏に台湾に行けない場合、ビザのいらない米国と豪州で台湾や中国に関する資料を閲覧しに行くヘッジ戦略を描いている。

ただし、冒頭に書いたように、これは万人に通用する話ではない。家族の状況、本人の健康状態、所属機関の制約、専門の違い（フィールドワークが必須、等）などがあり、一概に言えない。私自身、呼吸器系の基礎疾患があるため、コロナに怯えて2年間過ごしてきた。出張先で感染するリスクはまだ無視できない。

ただ、たとえそうであっても、上記の発想に基づいて所属機関のルール変更を進めれば、本人でなくても周囲の誰か——たとえば同僚や指導学生——が少し早めに海外渡航を再開し、研究を半歩でも前に進めることができるようになる。声を上げる価値はある。

私が台湾で学んだ最大の人生訓は「窮則変、変則通」であった。初めて台湾を訪れてから36年間、水のように融通無碍かつ無時無刻に行動を変える台湾の方々に、時には感嘆し、時には振り回されてきた。今こそ台湾の「変通哲学」に学ぶ時なのではないだろうか。

台湾に行けなくても、台湾から学ぶことはできる。それが台湾に関わり続ける者の幸運なのだと思う。

特 集

台湾／日本に行けない台湾研究

切られて芽の出ることもある

垂水千恵（横浜国立大学）

家の前の公園には古い桜の木が数本生えている。もともとは家の前の路全体が桜並木で、霞台という地名もそこから来ているのだが、老木となり洞が出来て危険だということで、ずいぶん切られてしまった。だから、残った桜に関しては、今年も咲いた、いや数年前のほうがよかった、と一喜一憂する癖がついた。花の時期は、なぜか雨が多い。花見の日が大嵐、ということもある。それでも咲き始めの時の風雨なら、花は散らない。しかし、盛りの後の花はあっけなく散ってしまう。

パンデミックなどと言うことは初めて知った。ベストやら、スペイン風邪などというものは文学作品の中にだけあるものと、なんとなく高を括っていた。2019年度は自分が代表を務める科研の最終年度で、代表としての申請はもう最後にするつもりで、2020年3月に結構大規模な国際ワークショップを計画していた。台湾、中国、シンガポール、マレーシア、香港、韓国、日本の研究者がネットワークを組み、毎年1回、それぞれの国を回りつつ、ワークショップを開催していた。1回目はマレーシア、2回目は台湾で、3回目を日本で開催する予定で、1年がかりで計画を立てた。プログラムも決まり、中国人研究者招聘の手続きも終わり、ホテル、レストランの予約、エクスカージョンの計画もできていた。報告論文もほぼ集まりつつあった。これで研究人生(?)総仕上げ、と思っていたところに「コロナ」である。

中国人研究者からの論文が届かないので、コロナの影響が出始めたのか、とは思ったものの、最初はさほど深刻に捉えていなかった。ダイヤモンド・プリンセス号のニュースが報道され始めても、（地元横浜港であったにもかかわらず!）「対岸の火事」くらいの気持ちだった。ともかく学年末の校務とワークショップの準備で忙しく、自分の頭の中でその二つがつながらなかったのである。

それが2月14日に最初のキャンセルが入った。残念だけれど、日本に行くと2週間出勤できないので、という文面の意味が分からず、首を傾げた。それからである。連日というより、毎刻、という間隔でキャンセルが相次ぎ、ようやく事の重大さを思い知った。今なら、すぐにリモート会議に切り替えただろう。今でこそリモート授業や会議も嫌いではないが、その時はZoomって何?というありさまで、相次ぐキャンセルの中で態勢を立て直す気力がわからず、結局ワークショップの開催は断念せざるを得なかった。

校務ではそれなりの多忙が続いたので自分でも意識していなかったが、どうやらワークショップの断念は想像以上に堪えていたようだ。何ともやる気が起こらない。たださえ盛りを過ぎていた研究の花(???)はコロナという嵐に無残に散ってしまったか……と自分でもあきらめかけたところを救ってくれたのは、偶然にも始めた盆栽である（ここで爆笑?）。初心者が語るのもおこがましいが、盆栽の面白さは切ることだと思う。切ること、次の芽が出てくる。（失敗して枯らすこともあるけれど…。）

今は、コロナという無情な鋏に切られてしまった枝からまた芽が出ることを期して、黙々と苔をいじりつつ次の企画を練る日々である。

バーチャル台湾研修の経験

福田円（法政大学）

私が勤務先の法政大学で毎年開講している演習（ゼミ）クラスでは、中国・香港・台湾のいずれかで海外研修を行うことが毎年恒例となっている。この研修は学生の有志を募って行うものであり、近年は台湾での研修を希望する学生が多く、台湾研修への参加をゼミ選択の理由に挙げる学生もいるほどである。私自身は、2020年度、2021年度と在外研修（サバーティカル）を取得しており、幸いコロナ禍のなかでも米国と台湾で現地調査を行うことができた。しかし、学生たちの海外渡航は難しい状況が続き、日常の演習もオンライン授業が殆どとなってしまったため、代講をお願いしていた教員とも相談した上で、バーチャル台湾研修を企画することにした。おそらく「台湾での現地研修ができない」という同様の問題を抱える会員は沢山おられると考え、私の経験を共有することで、様々な課題について議論を行うきっかけを作れたらと考える次第である。

2020年度と2021年度に行なったバーチャル台湾研修では、秋学期の演習の時間4コマ分を利用した。内訳としては、台湾で働くゲスト・スピーカーによるオンライン講演が2回、私自身の台湾に関するオンライン講義が1回、そして最終回は輔仁大学日本語学科の学生たちとのオンライン学生交流を行なった。私自身も海外からの参加であり、オンライン会議のオペレーションに自信を持てなかったため、すべて通訳を介さず、日本語のみで進行できるようにアレンジした。また、現地を訪れられないことを考慮し、ゲスト講師には、講演内容に加え、ご自身と台湾とのかかわり、現在の台湾の様子、新型コロナウイルス流行の影響を受けた変化などについてもできるだけお話しただくよう、事前をお願いした。自分の講義でも、米国と台湾それぞれの世論や社会の雰囲気や、自分自身が現地で体験したことに重きを置いて話を進めるように心がけた。

最も工夫を要し、課題が残ったのは学生交流であったが、私にとってはこれが最も興味深い経験でもあった。なぜなら、オンライン交流のアレンジを通じて、日本と台湾の大学がコロナ禍によって受けている影響の違いを感じ取れたためである。2020年12月に交流を行なった時、日本の大学ではオンライン授業は既に日常であったが、台湾ではその必要が殆ど無かった。こちらが想定したのは、Zoomのミーティングルームに全員集まった後、ブレイクアウトルームに日台混合の少人数グループを作り、議論を深めてもらうという方法であったが、台湾では教室での対面授業が続いており、その方法を理解してもらうことも難しかった。結局、日本では学生がそれぞれの端末から参加し、台湾の教室と繋いだ後、台湾側はノートパソコンや携帯電話で別途ミーティングルームにアクセスできる学生を通じて、少人数のグループに分かれてもらった。この点、2021年12月の交流時には、同年夏のコロナ流行を経ていたので、台湾側の状況とこちらの状況や認識はかなり近づいた。こうした技術的な面に加え、オンラインの交流は参加者が打ち解け、議論を進めるのに時間がかかるため、段階的な議題設定、ウェブ上で全員が書き込めるワークシートの作成など、議論を可視化し、共有するための工夫も行なった。

学生たちに感想を聞いてみると、バーチャル台湾研修のなかで最も印象に残ったのは、学生交流であったという。特に、コロナ禍のなかでの大学生活や進路などについて、現地の学生と直接話せたことが心に残ったようだ。それを聞いて、学生たちは自分で体験したり、対話をしたりすることを必要としているのだと感じた。来年度こそは現地で研修をすることが望ましいが、もしも叶わない場合は、文化体験や日本にある台湾探しなど、身体を使える活動も加えて、このバーチャル研修をさらに充実させたいと考えている。

いつかまた、京橋図書館へ

張文薫（國立台灣大學）・八木はるな訳

Instagram や Facebook である人が始めた活動は、みんなでコロナ禍になる前の、最後の旅行写真を「Show」しようというものだった。一瞬のうちに、FB は旅行番組さながらの様子を見せ、真っ白な雪や赤や黄色の葉っぱなど、色とりどりの風景が展示されるようになった。私の写真は 2020 年 1 月末に、京橋図書館で撮ったものである。その日は冷たい冬の雨が降っていて、東銀座のホテルから歩いて行く路上に、人影はほとんど見えず、ただ百年の老舗の鰻屋や、昭和の佇まいの豆腐屋の周りで、仕入れをする運送屋の掛け声だけが、高大な銀杏並木の間でこだましていた。

だが京橋図書館に入るなり、私は正面から熱気に襲われた。室内の暖房のせいだけでなく、座席が満席に近かったからだ。利用者の年齢層は極めて幅広く、席ではお年寄りや主婦、学生たちが本や新聞を読んでいたが、彼らが書架で本を探すことは減多になく、またコピー機も使わないので、ああ、ただ知識に囲まれるだけで人は暖かみを得られるものなのだな、と思ったものだった。

書架の間や上下の階をひっきりなしに行き来しているのは、私だけだった。この中央区立の図書館は決して大きいわけではないが、中央区の関連資料がとても秩序立って整理されている。江戸の絵葉書から現在の出版物に至るまで、京橋図書館の地下にある地域資料室で、銀座や日本橋一帯の都市文化に関心のある私は、史料と研究書の中から、これまで思いつかなかった問題意識や観点をたくさん発見することができた。戦前の台湾人学生が東京へ来ると、課業の合間に銀座へやって来ては、時間を潰したのだろうか？ 創作を志した植民地の青年たちは、銀座のバーカウンターからなかなか立ち去らず、隣の客と日本語で語り合いながら、同好の影を求めているのだろうか？ 戦争がいかにして、不要不急の消費文化を変えたのだろうか？ 商品を中心として成立する銀座の公共空間は、日比谷や上野等の地域性とは、どのような違いがあるのだろうか？

私はもともとこうした問題を抱えてやって来て、京橋図書館で自分の推測を証明する文献を探そうと思っていた。しかしこの所蔵資料が、このアイデアの語り方を大幅に広げてしまった。図版資料集が主となる史料の性質は、文字以外の歴史認識をいっそう提供してくれる点にある。京橋図書館の資料は、まだ圧倒的大部分がデジタル化されておらず、だからこの特定の場所に来て、階段を降りて資料室へ入る以外に、「資料」が名詞から実体へと変わるすべはない。「資料」はガラス棚の向こうにあって、ありうる内容をまず予測してから、一冊ずつ職員に出してもらい、ページを捲りながら内容を確認するというこの一連の過程こそ、まさしく実体図書館の魅力に他ならない。京橋図書館独自の分類陳列方式は、この「地域」的風景の様相を「Show」してくれている。

疫病が人の移動を困難にし、情報や通信のデジタル化が、人の空間移動コストを削減しつつ、資料を検索する時間も節約させた。しかしキーワードで検索をかけ、目標に直接狙いを定めるこのデジタル時代で、こうした情報獲得の手段というのは、まるで点对点の一方通行の道のように、地域的風景の中を散歩する余裕に欠けている。「資料」はパソコン画面の向こうにいて、キーワードを入れて飛び出してくるのは、相変わらず平面の資料であり、ハードカバーであるかペーパーバックであるかもなく、装丁もなく、差し込みページもなく、職員と利用者の温度もなく、匂いもないのである。「身体」を欠いたデジタル化資料は、海外旅行できない身体を救い出し、研究作業をより効率的なものにさえしてくれる。ただ電子コードが海洋と飛行の距離を埋めるたびに、私は相変わらず、東銀座から京橋図書館に至るあの銀杏並木を、そしてホテルからもらったあの花粉対策用のマスクが、意外にもコロナ禍で、台湾がマスク不足だったあの頃に、長らく私を支えてくれたことを思い出すのである。

恩人への追悼文

上水流久彦（県立広島大学）

「日本は恐共症でしょ」：これは、私が1994年から1996年まで台湾で現地調査をしていた時の大家さんの夫人、邱顔さんから言われた言葉だ。今思えば違う呼称もあったかと思うが、当時は「奥様」と呼んでいた。台湾初心者私は、奥様から萬華の歴史を習い、拝拝の習俗を教えてもらい（様々な祭日に自宅に呼んでもらった）、戦前の台湾の様子を聞かせてもらった。奥様無しでは、上水流の台湾での調査研究は成し得なかった。

ある日の夕方、フィールドワークを終えて帰ってきて、奥様と雑談しているときに流ちょうな日本語でこう言われた。奥様：「台湾は日本の妹みたいなものだから、日本に帰ったら日本人の人にちゃんと台湾のことを話さない。日本はキョウキョウショウでしょ」。筆者：「キョウキョウショウって何ですか」。奥様：「共産党、怖い、症候群よ。ちゃんと台湾の人々の気持ちを伝えてくださいね」。現在も広島で筆者が多少なりとも台湾のことを伝える活動が続けているのは、この奥様の言葉があったからである。今も、その言葉にちゃんと応えているかと自問している。昨年6月に97歳で他界された。

「台湾語に自信がないんだよ」：顔さんは、上記の奥様の弟である。顔さんの息子が私と同世代でかつ日本留学があるということで、奥様が紹介してくださった。顔さんは戦前、台北工業学校に通っていた。同じ成績でも日本人（いわゆる内地人）が台湾人よりも優遇されていたこと、何十年ぶりに参加した台北工業学校の同窓会で日本人同級生から「お前、日本語下手になったな」と言われたこと、戦後は日本語を駆使して日本の企業と商売をしたこと等を淡々と話してくださった。

北京語を話すことは好まず、パートナーとは台湾語（閩南語）か日本語で話をされていた。顔さんにとっては台湾語が母語で一番話しやすい言葉なのだと、私はずっと考えていた。しかし、ある日は私にこう語った。「台湾語に自信がないんだよな。ほら、大人になるまで日本語の教育を受けているだろう。だからやはり影響があるようなんだな」。顔さんと出会って約20年後（2015年）に日本語で伺った言葉だった。昨年12月に93歳で他界された。

「だから琉球でやりかえす」：連さんは2014年に中華保釣協会の総幹事であった黄さんから紹介され、その後、年に3、4回、食事をするようになった。蔡英文政権の顧問を務める人物とも知り合いで、私にも引き合わせてくれた。彼の政治信条からは想像できない顧問との関係だったので、私が不思議な顔をしていると、「政治は政治、友だちは友だち」とニヤリと笑った。そんな彼が沖縄を応援するとして、2016年にマカオの資本家の支援を受け結成したのが中華全球華人琉球之友協会である。結成の意図をフリーライターの友人とともに話を聞いたことがある。沖縄の自決・自治を支援したいと語っていたが、インタビューの後半、尖閣諸島に台湾の人を日本政府が行かせないからと述べた後で、本音をもらした言葉が「だから琉球でやり返す」だった。

2019年12月、韓国瑜支持者で、次の大統領選挙では絶対に彼が勝つと言い切っていた人物も一緒に3名で食事をした時に、「私も韓国瑜を応援しているが、彼が言うことは違うね。3月の食事代は、賭けに負ける彼のおごりだ」と言ったのが、彼との最後の会話だった。2020年春、コロナが広がり彼に会うことはできなかった。そして、2020年6月に72歳で他界された。

現地調査が研究の要である文化人類学研究において、コロナ禍で現地に行けないことは確かに辛い。しかし、それ以上に辛いのは、恩人との別れをちゃんと迎えることができないことだ。あの時の何気ない言葉のやりとりが最後になるとは思わなかった、葬儀にも参加せず申し訳ないと思う日々だ。こんな気持ちを持つ学会員も多いのではなかろうか。

コロナ禍で始めた学術系ポッドキャスト

松田ヒロ子（神戸学院大学）

新型コロナウイルス感染症の第3波が収束の兆しを見せ始めた2021年2月、私は本会会員の山本和行さんとIT系企業に勤務する友人のIさんと共に、音声メディア「ブック・ラウンジ・アカデミア（Book Lounge Academia/略してBLA）」を立ち上げた。BLAは、人文・社会科学系の研究書の著者がインタビューを通じて自著について語る音声メディアである。発足から2022年1月までに、28人の著者のインタビューを、YouTube、Google Podcast、Apple Podcast、Spotify、stand.fmを通じて配信した。台湾研究の紹介に特に力を入れているわけではないものの、結果的に台湾研究者の著者・編者のインタビューを比較的多く（6/28名）配信してきた。

本メディアの技術的なサポートを主に担当しているIさんは、私の学部時代の同級生である。修士課程を修了した後は大学や学会と関わる機会が減ったものの、余暇に学術書や研究論文を読んでいるということ、また、大学や研究機関に所属していないIさんにとって、論文や研究書を入手してじっくり読むことは容易でないことを以前から聞いていた。そうした話を聞く度に私は、自分に何かできることはないだろうかと思い巡らしていた。Iさんのように、知的好奇心から余暇に学術書や研究論文を読む人は多くはないだろう。だがたとえマイノリティであったとしても、こうした知的欲求を持つ市民に学術研究の成果を還元することは、研究者の使命のひとつではないだろうか、と。

米国では、コロナ禍前から、大学が講義を全世界に向けてオンライン配信したり、研究者個人がポッドキャストを使って様々な発信をしたりしていることは、日本でも知られている。私自身、New Books Network (NBN)という、研究書の著者がインタビューを通じて自著について語るポッドキャストを聴いていた。研究者個人が、大学や学会、マスコミ等を介せずに、自分の言葉で自由に語り、職業や居住地にかかわらず関心のあるリスナーが研究者のことばに触れることができるポッドキャストに可能性を感じた。だが、ポッドキャストが広く普及している米国と異なり、日本でNBNのようなメディアを実現化するのは難しいように考えていた。

そうこうしているうちに、新型コロナウイルスの蔓延により私たちの日常生活は大きく変貌を遂げた。数ある変化のうちのひとつは、ZOOMをはじめとするオンラインのミーティング・ツールの普及である。そうした変化を目の当たりにして、私は、ZOOMを利用してインタビューを収録し、音声メディアとして発信することができるのではないかと考え始めた。比較的若い世代では、ラジオのような音声メディアが静かに流行しており、米国のNBNのようなメディアが日本でも受け入れられる素地が作られているような気がした。そして実際にIさんや山本さんと実現に向けて動き始め、先にも述べたとおり2021年2月に初回配信を行った。

現在のところ、BLAはいずれの企業、大学その他の機関からの支援を受けず、3名の事務局ボランティアによって運営を続けている。非営利の無償ボランティア組織であるため、配信するインタビューの「聞き手」も「話し手」にも謝礼を支払うことはできない。運営状態は不安定で、今後いつまで続けられるか分からない。しかしだからこそ、私たちは、「研究書について語ることのたのしさ」にこだわっている。

実際、業績や謝金や締め切りとは一切無関係に研究書を読み、著者にインタビューすることは本当に楽しい。また様々な分野の研究者のインタビューを聴くことにより、著者の研究に対する情熱に触れることができ、励まされる。

会員の皆様もぜひ一度<http://www.bookloungeacademia.com>を訪ねてみてください。また、BLAで自著について紹介してくださる研究者の方、インタビューの聞き手として協力してくださる方はbookloungeacademia@gmail.comまでご連絡ください。

台湾に行けないコロナ禍期間の過ごし方 ——ソーシャルネットワークが繋いだモチベーション——

張文菁（愛知県立大学）

まだ人びとがコロナの脅威に薄々と気づき始めたばかりだった2020年2月、わたしは以前から計画していた調査のために台北に降り立った。当時は、横浜港に停泊中のクルーズ船で死亡者が出るなど、日本では市中感染が次第に広まっていたところだった。台北の空港は、中国大陆からの到着便こそキャンセルとなっていたが、日本に対する制限はまだなく、わたしはいつものように台北のホテルにチェックインし、すぐに国家図書館へ向かうことができた。しかし、滞在中に刻々と状況が変わり、3日後には日本の旅行者に対する警戒が引き上げられ、台南の友人との会食も遠慮して断る羽目となった。

あれから2年間も渡航できない状況が続いている。いつもなら年に2、3回ほどの調査で気軽に出かけていた台湾が、急に遠い場所になってしまった。コロナ禍の収束時期がまったく読めないにもかかわらず、わたしは台湾に行きたい一心で半年先、さらに一年先の航空便を予約してはキャンセルすることを繰り返してきた。研究調査がまったく進められない焦りを日々感じている。

そんな不安が拭えないなか、モチベーションを維持させてくれているのはFacebookやTwitterなどのソーシャルネットワークの繋がりである。台湾／日本に行けないもどかしさを多くの方と共有するだけではなく、ときどきオンライン飲み会で近況を語り合うことで癒やされ、引用した資料の出版を再確認する際にも助けていただいた。おかげさまで無事にこれまでの論文を単著『通俗小説からみる文学史——1950年代台湾の反共と恋愛』（法政大学出版局、2022年2月）にまとめることができた。2021年は、編集者をひどく困らせた異例の4校まで進行し、見落とし箇所への修正に追われながら、巣ごもりの時間を充実して過ごすことができた。

台湾に行けないことで困ったのは、研究面だけではない。大好きな台南の「小吃」が食べられないことも、私を悶々とさせた。台湾に行くと決まって訪れるレストランや屋台のグルメを友人がソーシャルネットワークで自慢げに披露するたびに、自由に行き来ができたら必ず「巡礼」したいお店のリストが長くなっていく。それでも解消されない台湾の美食に対する欲望に突き動かされ、コロナ禍の巣ごもり中に磨こうと決意したのは料理の腕である。通販や横浜中華街の食材屋を通して必要な調味料を買い込み、なんとか味の再現にチャレンジしているが、まったく足元にも及ばない失敗の連続である。

先日は、台南で美術展を開いた奈良美智氏が隔離期間中にホテルで食べた品々を紹介する記事を読み、本気で台湾に一週間だけ滞在し、好きな食事を届けてもらう隔離生活のプランを立てたところである。阿堂鹹粥や小杜意麵、福生小吃店、劉家肉粽など、挙げたら切りがない長いお店リストをいかに取舍選択するか、考えるだけでも1時間以上はかかるほど悩ましい。ホテルに滞在しながら楽しむ美食プランは、もちろんかなりの体重増が見込まれるが、それは仕方あるまい。

新型コロナに対応したバブル方式のグルメツアー、ぜひ台湾観光局に売り込みたい企画である。

コロナと私の人生転換期

周俊宇（國立政治大學）

2019年の年末、中国の武漢で新型コロナウイルス（Covid-19）が初めて報告され、その後テレビニュースやSNSなどを通して世界中にその感染状況の悪化が伝わっていった。のちにこのウィルスが

パンデミックとなり、長期にわたり、世界中に多大な影響をもたらすという結果を予想できた人が、この頃どのくらいいただろうか。私はその頃、日々東京郊外の喫茶店で博士論文の執筆に没頭していたが、その後の2年間に、自分の人生に大きな転換が訪れることを全く予想していなかった。

まず、博士論文の提出期限を控えた2020年の1月末、大きな病気が見つかった。病名等はここで敢えて記載しないが、すぐに治療を始めないとまずいと医師に告げられたので、瞬く間に2月中のスケジュールが、様々な検査や診察等によって埋まっていった。

最終検査の結果によっては、博士論文の提出を諦めることも考えていた。しかし幸いなことに、きちんと治療を受ければ完治できることがわかり、残りの1ヶ月は、指導教員の川島真先生に今後の日程について相談させていただき、また同じゼミの同志からも様々な助けをもらいながら、何とか入院の前日に論文を提出することができた。

2020年の3月は、東京でも感染が拡大し始め、重症患者や死者も増加し、医療機関も緊迫の度を増してきた頃であった。たった2カ月の差であるが、もし遅れて2カ月後に「病院にいったほうがいいのかもしいないという程度の小さな体の異常」が起きていたら、自分は感染を恐れて病院に足を運ばなかったと思う。恐らくというか100%、病気の発見も遅れていただろう。

入院時は面会も差し入れも、感染対策のために一切禁止された。入院中は家族とも会えず、まさに一人で病気と闘うこととなったが、5月の中旬には治療をほぼ無事に終えることができた。そのころは既に企業や大学など様々な場で、通常の対面授業や会議等は行われておらず、感染予防対策としてテレワークやオンラインでのやりとりが進められていた。口頭試問もオンラインで行われることとなり、私自身もテレワーク向けのデユースプランを提供するホテルの一室を借りて、「自分のホームで臨める」という思いで口頭試問に臨み、無事に終えることができた。

博士学位の取得後、有り難いご縁をいただき母校で特任研究員として務め始めた。また非常勤講師をしていた中国語の授業にも、治療が終わってからは復帰することができ、毎週2コマのオンライン授業も始まった。担当は大学一年生の授業であったが、最初から最後まで、学生さんと直接お会いできないままであった。しかし、語学の授業ということで、発音の練習などを通してなんとか声の交流だけはできた。2020年度の大学一年生は、対面の授業でも、学生同士の交流でも、その貴重な第一歩の経験ができないまま一年目が過ぎていって、本当に残念であったと感じている。しかしそれでもオンライン授業を可能にした技術の発展や学校関係者の努力があったからこそ、このような大変な時期でも、学術や教育の分野において授業を進められたのだと改めて感じた。

「オンライン授業」や「オンライン発表」など、「オンライン〇〇」は多くの方が経験されたと思うが、先に述べた口頭試問や非常勤の授業、打ち合わせ等のほかに、私は就職の「オンライン面接」まで経験した。台湾の大学に応募し、第一段階である書類審査の後、本来なら対面で行うべき第二段階の面接が、コロナ対策のためにオンラインで可能となった。口頭試問を受けた時とも似ているが、オンラインでのやり取りはやや臨場感に欠けるものの、何となく自身の「ホーム」にいるような感覚で臨むことができるので、いつもよりも自信が持てて、面接官の発言により集中することができた。

幸いにも2020年の年末に、現在の勤務先から結果をいただき、10年間暮らした日本を去ることになった。台湾のコロナ対策はとても厳しいので、引っ越しや出入国の準備などは非常に大変だった。

いま振り返ると、コロナ禍のこの2年間は、地理的にも、人生的にも、キャリア的にも、自分にとっての大きな転換点だった。本音を言えば、10年も暮らし、大事な成長期を過ごした日本で、お世話になった方々にお会いしたり、再び訪れたい場所に行ったりして、この地のひとつひとつにきちんと別れを告げたかったが、この2年間で「人に会う」ことや「でかける」ことは、大変贅沢な活動になってしまった。私はずっと、思う存分に何かをするというより、雑な言い方かもしれないが、とにかくできる範囲で行うような「ギリギリセーフ」な生き方でやってきた。しかしコロナになって、自身よりも大変な方がたくさんいると思うと、「ギリギリセーフ」でも人生の次の段階を迎えることができた自分は幸せ者であったと感じる。

いつか再び日本に自由に行けるようになったら、お世話になった方に直接お会いしたい、そして自身の研究についても思う存分に話しをしたいと思いながら、10年ぶりの台湾で早く新生活に慣れるように邁進する日々である。

コロナ禍におけるオンライン研究と恋しい台湾～アメリカから

松崎寛子（日本学術振興会・特別研究員）

コロナ禍が始まってもう2年以上経つ。コロナパンデミック発生当時、私はアメリカ・ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校にて在外研究をさせて頂いていた。現在も、同大学で、言語文化のオンライン授業を非常勤で担当している。

パンデミック発生以来、移動が制限されたことや、基本在宅ワークになったことで、研究のモチベーションが下がってしまったり、孤独を感じてしまったりすることは多かれ少なかれ、経験された方が多いと思う。

私が所属しているニューヨーク州立大学のアジア学・アジアアメリカン学研究科では、そのような状況を極力避けようと、月に一回、研究科所属の若手研究員を中心に、自分の研究内容についてオンラインで発表する場を設けられた。座長やコメンテーターは研究科内の中堅の研究員や教授たちが担当し、基本的に研究科に所属する教員はほぼ全員参加していた。それに学生たちや一般の参加者も参加できるような、開かれたアカデミックな講座シリーズであった。私も、2020年の7月に東方書店から拙著『鄭清文とその時代：郷土を愛したある台湾作家とその時代』を上梓したことを研究科長に挨拶がてら伝えた際、「それならば、ぜひ、Book Talkを」と拙著についてオンライン講演する機会を頂いた。一時間ほどの限られた時間ではあったが、研究科の教員を始め、学内の学生たち等、多くの方が参加してくださった。私が非常勤で担当していた言語文化科目の学生たちも「松崎先生の講演に応援に行きます！」とサポーターとして参加してくれ、彼らの専攻は理系や社会科学系がほとんどなのだが、今まであまり触れる機会のない台湾文学の話に興味を持って耳を傾けてくれたことが嬉しかった。また、アジア系アメリカ人の学生たちは、自身の家族史の体験とも重ね合わせて、意見や質問を投げかけてくれ、私自身も今までとは違う視点から自分の研究を再認識することができた。オンラインだったことで、ポストドク時代にお世話になったカリフォルニア大学のメンターの先生が参加してくださったり、時差にも関わらず日本から参加してくださった方もいたり、オンラインならではの交流ができたのは感無量であった。

最近では九州大学の台湾事情シリーズでオンライン講座を担当する機会を頂いた。九州大学の台湾事情シリーズ及び台湾スタディーズ・レクチャーシリーズについては、すでにご存じの会員も多いと思う。本会会員の前原志保先生が中心となって、「様々な視点から台湾を考えよう」と、各分野の台湾研究や台湾事情関係者を招き、公開講座だけでなく、映画上映や対談も開催している。前々から「私もぜひ、九州大学まで行って台湾事情講座を聴講したい！」と思ってはいたが、地理的な事情や子育ての事情などで、なかなか福岡まで足を運ぶことができなかった。しかし、オンライン講座に移行したことで、様々な分野で活躍される方々の興味深い台湾関係の講演を、遠いアメリカからも視聴することができ、コロナ禍で下がる一方であったモチベーションを上げたり、多くの刺激を受けたりすることができた。そして、ついには光栄にもオンライン公開講座の講演者としてお招き頂き、拙書を中心に台湾アイデンティティと文学というテーマでお話しする機会を頂いたのである。コロナ禍で、育児と研究の両立の難しさに悩んでいた時に、自分の研究について話げできたことは、私にとって大変大きな自信と励みになった。この場をお借りして、貴重な機会を与えてくださった方々に感謝申し上げます。

最後に、私が恋しい台湾について。台湾の恋しいものと言えば、枚挙に遑がない。その中で、特に恋しいのは、私の趣味でもある歌仔戲である。博士課程の院生時代、台湾大学台湾文学研究所に留学

していた時に台湾大学の歌仔戲サークルに入部して以来、その魅力に取り憑かれ、研究や私用で台湾を訪れる度に、お寺や廟の歌仔戲を見るのが楽しみだった。コロナ禍で台湾を訪れるのが難しくなっ
てからは、台湾のテレビ局公視が無料でオンライン配信する歌仔戲を見たりして台湾ロスの心を埋め
たりはしているが、やはり、廟の線香の煙や檳榔、タバコの匂いなどが入り混じる空気、そして大音
量の音楽、廟の赤い灯火に映し出される演者たちの息づかいを肌で感じながら、赤いプラスチックの
椅子に座って鑑賞したいのだ。今は自分が学生時代に保安宮で歌仔戲の小旦を演じた写真を眺めなが
ら、同じく育児をしながらアメリカの大学で教鞭を取る、台大歌仔戲サークルの旧友と、zoom 茶会
を開き当時の思い出話に花を咲かせるばかりである。



2008 年、台北市・保安宮にて著者。

日本へ戻れない研究生活

黒羽夏彦（國立成功大學・院生）

台湾でのコロナ感染状況は 2020 年の段階では落ち着いていました。もちろんマスク着用は必須、
社交距離をあけるなどの注意は求められましたが、日常生活にそれほど大きな変化はなく、大学の対
面授業は継続され、大学院の授業の一環として予定されていたフィールドワークも無事に実施されま
した。ところが、2021 年 5 月、台北・萬華でクラスターが発生すると情勢は一変します。中央流行
疫情指揮中心が発令する警戒措置は 4 段階ありますが、当初の第 1 級からあっという間に第 3 級まで
引き上げられました。私の住む台南での感染例は限定的だったのですが、第 3 級警戒は全土に適用さ
れたため、在宅を基本とする生活を強いられました。ただし、私自身は大学の研究室に通い、人影の
ほとんどないキャンパスは静かで、むしろ落ち着いて研究や仕事に専念できたという側面もありまし
た。同年 7 月には警戒措置は第 2 級に引き下げられ、10 月頃から大学の対面授業も再開、平常の生
活にほぼ戻りましたが、研究上の不便を強いられている状況は変わりません。

日本在住の台湾研究者にとっては台湾での調査が実施できないのが大きな壁かと思います。逆に私
の場合、日本統治時代初期（明治期に相当）の台湾について研究を進めており、また大学院の同学た
ちと大正期をテーマとした読書会を始めたこともあって、日本近代史関連の文献や資料も調べる必要
があります。台湾では日本時代の文献資料の電子化が進んでおり、国立台湾図書館「日治時期図書影

像系統」「日治時期期刊影像系統」、国史館台湾文献館「文献檔案查詢系統」、中央研究院台湾史研究所「台湾総督府職員録系統」、『台湾日日新報』の電子版などは日常的に活用しています。また、明治期の文献であれば日本の国会図書館デジタルコレクションで大部分が公開されており、こうした電子化資料は重宝しています。大学の紀要や一部の学会誌（日本台湾学会報も含みます）が電子化・一般公開されているのも非常に助かります。

他方で、戦後に刊行された学術専門書は電子化されておらず、紙の本を手取る必要があります。私は毎年2回前後、日本へ一時帰国の折に資料の調査・収集をしたり、必要な蔵書（台南には仮住まいの身の上で、蔵書のほとんどは東京の実家に置いたままです）を台南へ持って来たりしていたのですが、そうした行き来が事実上不可能となったため、日本語文献の調査で困難を感じています。私が在籍する成功大学の図書館は台湾南部では日本語書籍が一番充実していますし（1960～80年代刊行の日本語の歴史関係専門書はだいたい梁華璜教授の蔵書が寄贈されたものです。その後に刊行されたものは呉密察教授が成功大学台湾文学系・歴史学系に在任されていた頃、図書館に購入させたと聞いています）、また一週間ほど台北に滞在して国家図書館、台湾大学図書館、中央研究院図書館の所蔵本を調査したり（コロナ感染が拡大すると台北滞在も難しくなりました）、可能であれば図書館連携システムで取り寄せたりもしますが、それでも不十分です。

コロナ禍のため、研究会・学会等のオンライン参加が可能になったのは肯定的に捉えています。台南は国際空港がないので土日で日本との間をとんぼ返りするのは大変ですし、収入の不安定な立場では飛行機代・宿泊代を捻出するのも一苦勞です。こうしたプラスの部分はコロナ終息後も継続されることを希望しています。

台湾とタイランド

金子賢太郎（東京大学・院生）

突然ですが、わたしは今タイ王国におります。

渡泰したのは2020年2月。あのころは、国境を越えるのがこれほど困難になるなどとは、だれも予想していなかった。私のパートナー（エーちゃん・タイ国籍）はちょうど日本在留資格の申請準備を進めていたところだったので、とりあえず私がタイに残るかたちでしばらく様子を見ようという決定をした。そして今に至る。

わたしのタイのビザ取得はそこそこ面倒ではありましたが、それも数ヶ月で解決した。気持ちも少し落ち着いてきて、さてタイでなにができるか、と色々考え始めた。そして、チュラロンコーン大学（以下チュラ大）タイ研究科（Thai Studies）に聴講生制度があることを知る。全て英語で講義が行われるインターナショナルプログラムで、タイ語は全く必要ない。2021年1月からの第2セメスターに登録したが、願書を出した2020年11月時点では、授業がオンラインになるかオンサイトになるかは未定とあった。とはいうものの、そのころタイの状況はかなり良好で、オンサイトでの授業、そしてなにより大学図書館を利用できることに、かなりの期待を持っていた。

ところが12月に入り状況は一転した。当のチュラ大でかなりのクラスターが発生したこともあって、すぐに学期を通じて全てオンラインとなるとの連絡があった。まあ仕方がない。

オンラインだからなのか、開講科目は三科目のみ（タイの仏教、現代タイ社会、東南アジアにおけるタイ）でしたが、せっくなので全て履修登録した。当該学期からの入学者は博士課程4名、修士課程13名、聴講生2名で、通常の二倍くらい多いという話だった。それに加えて、提携校と思われるドイツの大学からも8名ほど、時差を乗り越えて受講していた。

ちなみにこのオンライン授業のZOOMはすべて録画されていた。現代社会に関する授業では王政や民主化運動に関するトピックもしばしば扱われましたが、なかには「録画されているから、ってわけ

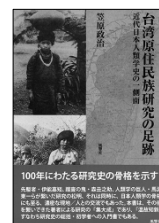
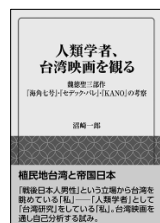
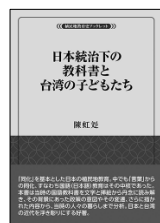
ではないけど、〇〇に関してはここでは言いませんよー（ってことで、察してねー）」と、政治的意見を冗談半分に見せかけて表明している（と思われる）講師の方も見受けられた。

英語での授業はどれも興味深い反面、文献リストにあるタイ語文献については、タイトルさえ読めないことがひどくもどかしく思えてきた。それで今度は少し腰を据えてタイ語に取り組んでみよう、同じくオンラインで行われていたチュラ大のタイ語コースの履修を決意する。

チュラ大タイ語コースは読み書きに重点が置かれた結構ハードなカリキュラムで知られている。進級も出席点、平常点、最終試験の合計が60%以上必要でかなり厳格である。初・中・上級に分かれて各々3レベルあり、月～金1日3時間であるから、1レベルあたりは90時間となる。5月スタートのクラスに申し込み、読解と文法のオンラインテストと音声ファイルで送った自己紹介スピーチの結果、私は初級3からスタートとなった。スピーキングの課題で使うパワポを深夜まで作ったり、作文課題にグーグル様の力を拝借したり、試験にでる単語や慣用句も必死で覚えたりしながら、なんとか2021年12月に中級3まで修了した。中級とはいうものの、テレビのニュース映像とスクリプトがそのまま教材として使われるので、民間の語学学校なら上級と称するのでは、とも思う。

このころになると標準的な辞書とされている小学館刊の『タイ日辞典』では間に合わなくなり、それで『現代泰漢詞典』が大活躍し始めた。『タイ日大辞典』（絶版）をネットで数万円も出して買う必要はなくなった。中国語ができて本当によかった。最近はタイ語BL小説の訳読が楽しくて仕方がない。

…とこのように、私は現在タイで「台湾」があまりにも登場しない日々を送っている。言い訳ではないが、最近読んだ小説で「学問とは乞食袋の如きもの」という言葉と出会った。この2年間で私の乞食袋にはタイ語とタイBLが放り込まれたわけだ。いつの日かどちらか一つでも研究に活かされますように。



ブックレット好評既刊

日本統治下の教科書と台湾の子どもたち
陳虹彰著
植民地教育は、「言葉」からの同化がその中核であった。国語教科書を丹念に読み解き、政策の意図やその変遷、当時の人々の暮らしまで分析。八八〇円

人類学者、台湾映画を観る
魏德聖三部作『海角七号』『セデック・バレ』『KANO』の考察
沼崎 郎著
映画にこめられた複雑な歴史の位相や民族のアイヤを、戦後生まれの日本人男性という立脚点を定めて、さまざまな角度から読み解く。八八〇円

植民地台湾を語るといふこと
八田與之の「物語」を読み解く
胎中千鶴著
戦後も「台湾農業の恩人」「日本精神の体现者」として敬愛される日本人技師の数奇な生涯。顕彰の経緯と背景から日台双方の語りの理由を考える。追補改訂版。七七〇円

客家 エスニシティーの形成とその変遷
瀬川昌久著
清末以後、顕著となる客家知識人による自文化への言及は、民衆や海外との呼応・共振によって、やがて鮮明な自画像・他者像を生み出した。エスニシティー現象」という人類史の普遍的課題への細密な考究。三九六〇円

台湾原住民族研究の足跡
近代日本人類学史の側面
笠原政治著
先駆者・伊能嘉矩、踏査の鬼・森丑之助、人類学の巨人・馬淵東一らが繋いだ研究の松明、それは日本人類学の骨格にも至る、濃密な現地／人との交流でもあった。研究史の総括・初学者への入門書。三九六〇円

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
TEL 03-3828-9249 (価格はすべて税込)

風響社

本学会の会員向け【特価販売サイト】
(出版相談も受け付けます)



距離を越えよう

伊蒙楽（一橋大学・院生）

中国大陆から見れば、馬英九が総統であった時期は、中国大陆と台湾の関係は良好で、経済、文化の交流はいうまでもなく、教育面でも、交換留学のチャンスがかなり多かった。筆者もそうして高雄に交換留学の機会を得た一人である。

中国人である筆者にとって、交換留学以前の台湾に対する印象は、「中国の宝島」、戦争で割譲された犠牲者といった抽象的なものであった。2014年に初めてその地に踏み入れ、台湾に対するイメージはようやく立体的な模様を呈した。今考えると、筆者が研究している呉濁流が大陸へ渡った気持ちと少し似ているところがあるだろうか。

台湾についた時の第一印象は、正直にいうと、やや失望だった。高雄空港が小さくボロボロだったためだ。しかし、雨の跡のついたバスの窓から台湾の道を見た時、失望の気持ちは薄れていった。歴史感溢れる町づくりを通して、数十年前の繁栄の光景もかすかに見える。

数ヶ月後、筆者は台湾での暮らしに適応していた。台湾は快適で人間味に溢れ、ゆったりとした社会リズムで人々の焦慮を癒し、鋭い神経をリラックスさせる。そうして、この交換留学は自分の台湾文学を研究する萌芽ともなった。

台湾文学を研究してからの台湾への旅は、2019年の夏であった。横地剛先生のご紹介をいただき、台湾で藍博洲先生、葉蔚南先生、徐秀慧先生、呂正恵先生に会うことができた。苗栗で藍先生の家を訪ね、藍先生夫婦が呉濁流数位館を案内してくれた。さらに台中で葉榮鍾の息子である葉蔚南先生と徐秀慧先生の家では、葉先生の手作り料理を食べた。人間出版社で呂正恵先生にも会い、実に収穫の大きい旅だった。

最近ふと人間出版社のことを思い出す。陳映真によって作られたこの出版社も2020年末に休業してしまった。さらに、横地先生から「今回の台湾での経験を文章にしないか」と勧められたが、先生は2020年にこの世を去っていかれたので、ご存命のうちに提出できなかったのを心残りに思う。

今回の特集の主題に戻ろう。20世紀前半、戦争、波乱といった時局は東アジア諸国／地域を一つの地図に載せ、未曾有の緊密な繋がりをもたらした。しかしコロナは、各地域間の移動を困難にさせた。もちろん、必ず台湾に行かなければならないわけではないが、誰もが自由に移動できないことの不便さを感じたと思う。コロナによって、今まで当たり前だと思っていたことができなくなった。渡航制限、隔離の必要はもちろんのこと、中国人である筆者にとっては、台湾はネットで申請すればビザを取得でき、比較的入境しやすい場所だったが、それも遠い思い出になってしまった。コロナは、交通の発展によって麻痺していた地理的な距離感を人々に改めて認識させた。

研究への影響については、まずは台湾に行けないことだろう。この間、台湾でどれほどの論文が出たのか、もし台湾に行けるならば今より学界の状況を把握できるであろうし、多くの先生と交流の機会があり、様々な意見をもらえたであろう。そうした気掛かりは拭えない。また、コミュニケーションが少なくなったことで、台湾との距離感も次第に深まり、研究の孤独さを強く感じるようになった。

一方、ネットの発達のおかげで資料は入手しやすくなっている。筆者は昨年、鍾壬寿に関する資料を探していた際に、かつて同じ資料を求めたことのある台湾人研究者の連絡先を見つけた。そのうちの一人は淡江大学の曾令毅先生で、先生からは鍾壬寿の回顧録をいただいた。また、台湾交通大学の博士後期課程の廖彦豪さんからも論文数本をいただき、それらの資料を使い、2021年に2本の論文を完成させ、それぞれ発表することができた。

また、学術界のあり方も変わった。その中で最も著しいものは、学会や研究会の参加方法であろう。台湾で開催した「台湾と東亜近代史青年研討会」に参加したとき、筆者は家にいて、上半身のみのフォーマルな服装をして下半身はパジャマのままで発表をした。また、2021年の日本台湾学会もオ

ンライン開催となった。そうしたオンライン発表によって、学会が地域の制限から解放され、より自由かつ広い範囲から参加することが可能になっている。さらに各種の研究資料のデジタル化、知識の共用などの側面から考えると、コロナは地域間の移動を難しくさせたが、その一方で知識の「移動」を加速させたのかもしれない。

昨今のコロナ禍にあっては、一人の研究者として、雲が晴れて月が現れる日を待ちながら、前向きな気持ちをキープするしかない。しかし積極的に考えれば、コロナは地理的な距離を超えた交流を促し、知識を共用しやすい学術界を構築するきっかけとなったようにも思う。

最後に、なにより台湾で牛肉麺を食べたくてしかたがない。コロナの1日も早い終息を心から祈る。

オンライン版

2020年リリース

臺灣日日新報 音声文化データベース

漢珍數位圖書 (Transmission Books & Microinfo)

総代理店: 丸善雄松堂

『臺灣日日新報』は、日本統治期台湾の日常音楽生活と音声文化に関わる資料を豊富に含みます。本データベースは、『臺灣日日新報』に収録されている音楽関連の記事を収録し、総数は約357,200件にのぼります。音や聴覚の視点から歴史を探究することが近年国際的に重要な潮流となるなか、日本統治期台湾の文化に「音」からせまるデータベースです。

収録期間：1898年-1944年3月31日

内 容：パフォーミング・アーツ、マスメディア、伝統行事など

全文検索の機能はありませんが、非常に詳細なキーワード検索（キーワードの総数2,650万以上）を備えています。購入型、年間購読型がございます。価格などの詳細はお問い合わせください。

※本データベースには、音声そのものは収録されていません。

M MARUZEN-YUSHODO 丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部
〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル TEL 03-6367-6114 FAX 03-6367-6160 e-mail: e-support@maruzen.co.jp

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

第150回日本台湾学会定例研究会活動内容

日時：2021年8月5日（木）16:00～17:50

題目：「台湾における中国ファクター」の現在地

会場：Cisco Webexによるオンライン会議

参加者数：約80名

活動報告：

本研究会では、2021年6月に刊行された『中国ファクターの政治社会学 台湾への影響力の浸透』（川上桃子・呉介民編、津村あおい訳、川上桃子監訳、白水社）の内容を起点として、台湾における中国ファクターの最新状況を論じる三つの報告が行われた。

川上桃子（アジア経済研究所）は、「中国ファクター」概念と上掲書の概要を紹介し、2018年以降の米中対立、19年以降の香港情勢の緊迫化、20年以降のコロナ禍の発生といった直近の情勢変化が中国の台湾に対する経済を通じた影響力の行使に与えている影響を検討した。呉介民（中央研究院）は、今年5月以降、台湾において顕在化したコロナ・ワクチンの不足をめぐる政治危機をとりあげ、この問題をめぐる中国ファクターを論じた。古明君（国立清華大学）は、台湾と中国の媽祖信仰コミュニティ間交流を事例に即して、中国政府が、海峡をまたいだ信仰ネットワークを対外的な影響力のチャンネルとして動員・再編するようになった過程とその背景を報告した。

以上の報告を受けて、園田茂人（東京大学）が、自身が行ってきたアジアにおける意識調査の成果を踏まえつつ、問題提起と討論を行った。続いて、津村あおい、鐘寧による通訳協力のもと、フロアとの質疑応答を行った。中国による情報操作やフェイクニュース拡散の現状、台湾への影響力行使にみる中国の目標の具体的内容、宗教を通じた統一攻勢の効果の世代別の違い、台湾における中国ファクターの特異性などについての質問が寄せられ、園田コメントへの応答とあわせて、報告者がそれぞれ回答した。（記録者：川上桃子）

第151回日本台湾学会定例研究会活動内容

日時：2021年9月25日（土）14:00～17:00

題目：『家族を生み出す』オンライン合評会

会場：YouTubeを用いたオンライン開催

報告者：

自著紹介とリプライ：横田祥子（滋賀県立大学人間文化学部）

評者：田上智宜（熊本学園大学外国語学部）

松村智雄（大阪大学言語文化研究科）

司会：新田龍希（早稲田大学台湾研究所次席研究員）

参加人数（参加申込者数）：36名

活動報告：

台湾では、1990年代末から国際結婚が社会現象として認知され始めたが、その多くが仲介業者の斡旋を通じて成立したものであった。仲介業者の介入による国際結婚は国家間の圧倒的な経済格差を

背景としており、台湾人男性と結婚する外国人女性には中国大陸や東南アジア諸国の出身者がかなり多い。こうした事象を文化人類学のアプローチを用いて解明することが、本書の目的である。

著者の横田氏は、本書では台湾の台中県とインドネシアの西カリマンタン州で行ったフィールド調査を基に、再生産労働の国際分業化と婚姻戦略の視座から、台湾社会における国際結婚と家族の在り方について明らかにしたと述べた。

それに対して、一人目の評者の田上氏は、従来の結婚移民に関する研究では社会学的考察が多かったが、本書は台湾（受け入れ側）とインドネシア（送り出し側）への長期参与観察という文化人類学的手法により、再生産労働に従事する結婚移民とその家族の変容を的確に把握したという点を高く評価した。また、田上氏から、国際結婚における贈与交換、インドネシアのシンカワン以外の華人地域の状況、エスニシティへのこだわりの原因について質問がなされた。

続いて、二人目の評者の松村氏は、本書に関わる「圧縮された近代」の概念を提起し、インドネシアの西カリマンタンの歴史的な背景を詳しく説明したうえで、台湾の国際結婚にみられる特徴や華人研究への重要性などを指摘した。そして、松村氏からは、日本との比較、台湾における東南アジア像、ダヤク人との結婚、台湾の多文化主義、2008年以降の業者婚の変化、結婚をめぐる漢民族の規範のダイナミズム、自由主義的家族主義に関する評価について質問がなされた。

出席者からは、漢族の婚姻習慣や子孫を残す圧力の普遍性や、国際結婚の仲介業者の実態、フィールド調査の難しさなどについて質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。（記録者：魏逸瑩）

第152回日本台湾学会定例研究会活動内容

日時：2022年1月29日（土）14:00～16:00

報告題目：「誰の台湾史——生きられた歴史からの問い」

会場：YouTubeによるリアルタイム配信

報告者：洪郁如（一橋大学社会学研究科・教授）、北村嘉恵（北海道大学教育学研究院・准教授）

趣旨説明：新田龍希（早稲田大学台湾研究所・次席研究員）

参加人数：157名（登録者数）

活動報告：

本研究会は、2021年に出版された『誰の日本時代』（法政大学出版局）をめぐって著者の洪氏と台湾近現代史研究者の北村氏の対談を中心に行われた。同書は、李登輝（元総統）の逝去と新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより日本の台湾認識が転換点を迎えている現在、「台湾のいまを知るためには、台湾の過去、日本が深く関わった時代に正面から向き合う作業が避けて通れない」という点を前提にしている。しかし、日本統治時代に生きた人々の歴史経験と記憶は、今なお90年代に構築された言説に大きく依存しているため、洪氏はそれを意識しながら、これまでの歴史叙述において不可視化ないし軽視されてきた主体、とりわけ「周縁化された多数」に関心を寄せ、彼ら／彼女らの植民地統治、近代教育、戦争、「戦後」の経験に取り組んだ。

対談では、同書をいかに読むべきか、同書の到達点、そしてこれから目指すべき課題とは何であるかが、メインテーマとなった。北村氏は同書で取り上げられた人物の略歴を整理した上で、洪氏と以下のトピックを中心に議論を行った。①起点としての「和解」への意志、「和解」への回路、②誰のどのような経験や記憶が不可視化されてきたのか（本書の視座、方法および射程）、③識字／就学／教育、④植民地体験／帝国体験、戦争体験をどう叙述するか、⑤脱帝国化の実践に向けて（植民地／帝国の記憶）。

洪氏は最後に、「台湾の日本時代」を逆側からみると、それは「日本の台湾時代」でもあると語り、台湾の日本人社会についての既存研究はほとんどないため、この点は日本近現代史にとって重要な課題でもあると指摘した。（記録者：魏逸瑩）

定例研究会
関西西部会研究大会

担当幹事：澤井律之（京都光華女子大学）

昨年12月18日土曜日の午後、キャンパスプラザ京都にて第19回関西西部会研究大会を開催した。コロナの新規感染は減少し、会場のある京都の駅前もたいへんな賑わいであったが、会は対面とオンラインを併用して行った。

発表内容は以下のとおり。

①「2000年以降の現代美術(2)」のための考察

藤田千彩 評論：林初梅（大阪大学）

②汪精衛政権を経験した台湾人の回顧録に関する考察－呉濁流、鍾壬壽を中心に－

伊蒙楽（一橋大学大学院） 評論：明田川聡士（獨協大学）

③台湾原住民族の文化復興と文化産業化をめぐる諸問題

－ルカイ・クンガダワンの黒米祭の事例を通して

尤驍（神戸大学大学院） 評論：原英子（岩手県立大学）

④彼女たちのストーリー（Her-story）をディスプレイする

－台北・上海・ソウルの慰安婦博物館展示の比較から

前原志保（九州大学） 評論：須藤瑞代（京都産業大学）

⑤台湾倉庫株式会社の「社外船ステベドア」事業について

齋藤尚文（兵庫県立国際高等学校） 評論：池上寛（アジア経済研究所）

①の発表の藤田さんはアトライターで、近年の現代美術に関心をよせている。タイトルに（2）とあるのは「2000年以降の現代美術（1）－国府理《虹の高地》にみる作品のありかた－」の続編のための考察である。国府理（こくふ・おさむ）は日本のアーティストだが、藤田さんは台湾の現代アートに視野を広げ、本発表では郭俞平（1986～）、丁昶文（1979～）等の作品を取り上げ分析した。藤田さんは足繁く台湾の美術展覧会を訪れ、アーティストとも交流をもっておられようであった。コメントーターの林初梅さんは、研究の珍しさを評価しつつも、目的・課題・分析方法の不明瞭さを指摘された。藤田さんは、現代アート研究でのキャリアがあり、今後の研究の進展が楽しみである。

②の伊さんは呉濁流研究であるが、呉濁流が1941年、汪精衛政権下の南京にわたり、『大陸新報』の記者になった時期に注目する。とくに呉濁流の回顧録で頻繁に登場する鍾壬壽に焦点をあてて、論じた。なかでも鍾壬壽の回顧録『友善抗日70年－君子国日本の再建を望む』を発掘し、これをもとに鍾の事績をあとづけ、鍾が汪精衛政権で何らかの役割を果たしていたことを突き止めている。コメントーターの明田川聡士さんは、鍾が文化工作をしていたことを指摘したが、今後の研究の深化が期待される。

③の尤さんの研究は、台湾原住民の近年の文化復興について論じた。2016年から2020年にわたって断続的に、計12ヶ月間、ルカイ族の集落クンガダワン（高雄市茂林区多治里）で行ったフィールドワークをもとにした、非常に重厚な研究で、原住民社会の変貌する現在を具に伝え、分析した。コメントーターの原英子さんは、この研究を詳しく解説して、パイワン族、ピューマ族との比較の視点、さらに黒米祭（黒いアワの神話）の名称について原住民語との関連等を指摘された。なお、尤さんはフィールドワークを今後も継続するとのことだ。

④の前原さんの発表は、日本軍の「慰安婦」関連の博物館のフィールドワークである。ソウルの戦争と女性の人権博物館、上海の中国慰安婦歴史博物館、台北の阿嬤之家－和平與女性人権館を取り上げ比較検討された。共通するものとして、「愛国」「ナショナリズム」から逃れられないジレン

マ」と「若い」「騙された」慰安婦イメージの固定」等を指摘された。コメンテーターの須藤さんは「誰が、誰に、何を」伝えるのかという観点の必要性を訴えた。報告書を作成しているわたくし澤井は、改めて慰安婦を過去のものにしてはいけないと思った。

⑤の齋藤さんは、戦前、樟脳と砂糖の貿易商として世界に名をはせた鈴木商店を研究されすでに『鈴木商店と台湾』（2017）を上梓されている。今回の発表は、「日本統治期台湾の港湾荷役業」という大きな研究テーマのうちの、「台湾倉庫株式会社」に焦点をあてたものである。1916年設立されたこの台湾倉庫が、大阪商船と日本郵船以外の荷役を請け負うステベドア（船舶荷役請負業者）として成長し、様々な軋轢を乗り越え、やがて運送をも兼営する一大倉庫会社へと成長していく過程を、資料を駆使して詳述した。

発表者の中には、はるばる東京や九州からお越し下さった方もおられ、ありがたいことでした。また、オンラインのおかげで、遠方の、また外出がままならない会員の協力も得ることができました。参加人数は、対面17人、オンライン20人でした。閉会後の懇親会は、街は年末の大賑わいをみせていましたが、自粛いたしました。

離散と回帰

「満洲国」の台湾人の記録

許雪姬著／羽田朝子・殷晴・杉本史子訳／A5判616頁／税込8800円
台湾人でありながら「日本人」でもあった彼らは、何故「満洲国」へ渡ったのか、現地でどのような生活を送ったのか。オーラルヒストリーや資料を駆使して実態を描き出す。（台湾学術文化研究叢書）

孔子廟と儒教

学術と信仰

黄進興著作選集（二）

黄進興著／中純夫訳／A5判482頁／税込5500円

孔子の末裔たちの私的な孔子祭祀が国家の祭祀系統に組み込まれていく過程や、儒家の道統に対する歴代の価値基準などを分析し、儒教史・儒学史の変遷を映し出す。（台湾学術文化研究叢書）

孔子廟と帝国

国家権力と宗教

黄進興著作選集（二）

黄進興著／工藤卓司訳／A5判338頁／税込5500円

如何にして孔子廟が中華帝国の礼制に組み込まれていったのか、ひいては政治に取り込まれていったのかを、孔子廟を巡る様々な歴史的事象を丹念にたどりながら考察。（台湾学術文化研究叢書）

鄭清文とその時代

郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容

松崎寛子著／A5判304頁／税込5500円

日本統治期台湾や都市と地方の関係、環境問題を取り上げた作品を多く残した作家鄭清文の作品を緻密に分析する。

フォルモサに咲く花

陳耀昌著／下村作次郎訳／A5判440頁／税込2640円

一八六七年、台湾南端の沖合でアメリカカ船が座礁し、一三名が原住民族に殺された。本書はこの「ローバー号事件」の顛末を、台湾原住民族を中心に、さまざまな視点から描く歴史大河小説である。

東方書店

ホームページ〈中国・本の情報館〉<https://www.toho-shoten.co.jp/>

*価格税込

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 / 営業電話 03-3937-0300 / FAX.03-3937-0955



定例研究会
台北

担当幹事：田畠真弓（専修大学）、報告：富田哲（淡江大学）

第 87 回台北定例研究会

日時：2021 年 10 月 23 日（土）15:00～

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：黄馨儀（静宜大学日本語文学系）

テーマ：日治時期台湾之通譯-試論東方孝義

コメンテーター：富田哲（淡江大学日本語文学系）

使用言語：北京語

第 88 回台北定例研究会

日時：2022 年 1 月 15 日（土）15:00～

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：藤井久美子（宮崎大学多言語多文化教育研究センター、東呉大学日本語文学系博士課程）

テーマ：台湾社会の多言語化と双語国家政策に関する一考察

コメンテーター：富田哲（淡江大学日本語文学系）

使用言語：日本語

※ハイブリッド開催

学会運営関連報告

川上桃子（アジア経済研究所）

第 11 期理事会

第 6 回常任理事会 議事録（抄）

日時 2021 年 3 月 7 日（日）13:00-18:00

場所 オンライン開催（Webex）

出席 松田康博（理事長兼第 23 回大会実行委員長）、北波道子（副理事長）、赤松美和子、家永真幸、大東和重、上水流久彦、川上桃子、洪郁如、富田哲、三澤真美恵、山崎直也（以上、常任理事）

欠席 菅野敦志（委任状）

主宰 松田康博理事長

書記 明田川聡士

報告

1. 理事長・事務局

（1）松田理事長

特になし。

(2) 川上総務担当理事

第12期理事会選挙への対応について報告がなされた。

2. 各業務担当

(1) 川上総務担当理事 (①理事選挙結果について ②学会賞選考について)

①第12期理事会選挙結果について報告がなされた。

②学会賞選考委員会による第11回日本台湾学会賞の選考結果について報告がなされた。

(2) 山崎会計財務担当理事

配付資料にもとづき、第11期第5回常任理事会(2020年12月6日)後の主な支払いについて報告がなされた。

(3) 福田広報担当理事(川上常任理事による代理報告)

配布資料にもとづき、学会ホームページ、学会ブログ、メーリングリスト登録状況、サーバーの契約更新等の運用状況について報告がなされた。

(4) 大東ニュースレター担当理事

「ニュースレター」(第40号、2021年4月発行予定)の編集状況について報告がなされた。ニュースレターは、現在第40号を編集中であり、特集は「台湾の変化を感じたとき」とした。依頼していた原稿はほぼ届き、まもなく著者校正が始まる予定である。発行は4月上旬、配信は3月末を予定している。

(5) 上水流編集委員長

『学会報』(第23号、2021年6月発行予定)の編集状況について報告がなされた。例年通り6月中の発行に向けて準備を行っている。

(6) 富田企画委員長

配布資料にもとづき、学術大会(第23回、2021年5月開催予定)の準備状況について報告がなされた。

(7) 菅野国際交流担当理事(川上常任理事による代理報告)

配布資料にもとづき、対外発信強化プロジェクトおよびIJTS(International Journal of Taiwan Studies)誌との連携協力について報告がなされた。

(8) 洪文献目録担当理事

「戦後日本における台湾関係文献目録」について報告がなされた。2021年3月7日現在の総レコード数は、全件18,499件、2019年12月以来日本台湾交流協会ホームページでの更新はない。2020年10月～2021年3月分の文献目録については、2021年3月末に送付予定である。

(9) 定例研究会担当幹事

関東(川上常任理事による代理報告)、関西(北波副理事長による代理報告)、台北(富田常任理事による代理報告)での定例研究会について報告がなされた。

3. その他

(1) 上水流常任理事

IJTS誌への英語書評について報告がなされた。英語書評については編集委員会で選定し、依頼を行った。その費用については、翻訳代にあてる場合は1万円を上限、校閲の場合は1万円前後ということで常任理事会の了承をメール審議で得ている。

議題

1. 第23回学術大会について

(1) 準備状況について(松田実行委員長、富田企画委員長、山崎実行委員、赤松実行委員)

配布資料にもとづき、実行委員会および企画委員会より大会準備状況について確認がなされた。審議の結果、承認された。なお、オンライン開催ではあるが、報告者には集中して報告、参加して頂くために例年通り託児施設利用時の補助を行うことに決まった。

(2) 大会予算案について（五十嵐実行委員：松田実行委員長による代理報告）

配布資料にもとづき、実行委員会より大会予算案について確認がなされた。審議の結果、承認された。

2. 日本台湾学会賞規定の改正案について（三澤常任理事）

配布資料にもとづき、日本台湾学会賞の規定等に関する審議がなされた。審議の結果、日本台湾学会賞の改訂にあわせて、日本台湾学会学術賞（新規）、日本台湾学会特別賞（新規）を設置することが承認された。

3. 賛助会員へのサービスについて（川上常任理事）

配布資料にもとづき、賛助会員サービスの拡充案について審議がなされた。審議の結果、承認された。

4. 「戦後台湾関係目録」の廃止について（洪常任理事）

配布資料にもとづき、「戦後台湾関係目録」の廃止について審議がなされた。審議の結果、継続審議となった。

5. 会員の入退会、シニア会員への移行について（川上常任理事）

特になし。

6. その他

(1) 理事会日程について

理事会は2021年5月22日（土曜日）日本時間10時よりWebexで開催することに決まった。

(2) 会費のクレジットカード決済について

年会費や大会参加費の徴収に際し、クレジットカード決済を導入してはどうかという意見が出された。

(3) オンラインストレージの導入について

情報共有、アーカイブのためにオンラインストレージを導入してはどうかという意見が出された。

以上

【第12期常任理事会第2回会議議事録】（抄）

日時 2021年12月17日（金） 14:00-18:30

場所 Zoom オンライン会議

出席 赤松美和子、家永真幸、大東和重、上水流久彦、川上桃子、北波道子、洪郁如、菅野敦志、富田哲、福田円、松金公正、松田康博、山崎直也（以上、常任理事）、三澤真美恵（理事）

主宰 松田康博（理事長）

書記 五十嵐隆幸（幹事）

【報告】

1. 理事長・事務局

(1) 松田理事長

特になし。

(2) 川上事務局担当理事

設立以来、事務局で引き継いできた保管物（学会報バックナンバー在庫、古いパソコン等）を処分した。

2. 各業務担当

(1) 川上総務担当理事

前回の常任理事会（2021年7月30日）終了後、入会6件、退会5件、シニア会員への移行1件をメール審議で承認した。

(2) 山崎会計財務担当理事

配付資料にもとづき、前回の常任理事会後の主な支払いについて報告がなされた。学会費のクレジットカード払いの導入については議題として検討する。

(3) 福田広報担当理事

配付資料にもとづき、学会ホームページ、学会ブログ、メーリングリスト登録状況、ウェブサイトリニューアルの準備状況について報告がなされた。

(4) 赤松ニュースレター担当理事

来春発行予定のニュースレターの編集状況について報告がなされた。

(5) 松金編集委員長

配付資料にもとづき、『日本台湾学会報』（第24号）の投稿、査読状況について報告がなされた。

(6) 富田企画委員長

配付資料にもとづき、第24回学術大会の応募、審査状況について報告がなされた。

(7) 菅野・洪国際交流担当理事

配布資料にもとづき、対外発信プロジェクト（優秀学会賞論文の英訳支援）、IJTSへの書評推薦の進捗状況、WCTSへの派遣など、国際交流事業について報告がなされた。

(8) 洪文献目録担当理事

戦後日本における台湾関係文献目録にかかる事業の終了に関する報告がなされた。

3. その他

特になし。

【議題】

1. 第24回学術大会（2022年5月28日～29日）について

(1) 大会プログラムについて（富田企画委員長）

分科会企画4本（うち1本は台湾文学学会員から）、自由論題報告12本の申請があった。プログラム案については、開催方式決定後に準備する。

(2) 会場校の準備状況、大会予算案等について（福田実行委員長）

配布資料にもとづき、学術大会の準備状況および予算に関する報告がなされた。

2. 日本台湾学会学術賞、同特別賞の選考について（三澤理事）

配布資料にもとづき、推薦要領（案）などについて審議を行い、承認した。同賞に関する財源についての検討の必要性が提起された。

配布資料にもとづき、学会ロゴに関する審議が求められた。2021年12月下旬から2022年1月中旬にかけて会員投票を行い、5月の学術大会でお披露目する予定である。

アジア政経学会からの提案を受け、同学会の2022年度春季大会で台湾学会会員によるセッションを設ける方向で準備を進める。

業者からのプレゼンを受けて学会費のクレジットカード払いについて審議を行った。メリット・デメリットを勘案し、各常任理事からの質問を業者に確認し、その回答を踏まえて次回の常任理事会で継続審議する。

事務局への寄贈書籍の活用について審議を行った。今後の活用方法については、学会ウェブサイト上に掲載する。

入会申請1件が承認された。

学術大会の準備状況に照らし、2022年3月から4月の金曜日に実施する。

[illegible]

・次号 43 号（2022 年 10 月発行予定）は、第 24 回学術大会の活動報告をお届けします。今年は
オンサイト（法政大学市ヶ谷キャンパス）とオンラインを融合した「ハイフレックス方式」で行う予
定です。

(赤松美和子・八木はるな)

* * * * *

日本台湾学会ニュースレター 第42号

発行：日本台湾学会（代表 松田康博）
発行年月：2022年4月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
アジア経済研究所気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学比較文化学部 赤松美和子研究室気付

E-mail: akamatsu.miwako@otsuma.ac.jp
harunayg@gmail.com